

▶ 白川・緑の区間のデザイン

▶ 熊本大学大学院先端科学研究部 准教授 星野 裕司

熊本大学の星野と申します。最後のプレゼンになりましたけれども、先ほど鶴田さんからもちょっとご紹介があった白川の事例をお話しします。最初に萱場さんの方からいろいろな論点が出ていましたけれども、私は景観デザインを専門としていますので、空間デザイン、あるいは川とまちのつながり方というところを紹介しがてら、そんなお話をしていけたらと思います。

先ほど鶴田さんのお話にもありましたけれども、これがピフォーです。こっちがアフターになりますけれども、こっちが流量でいうと 1500 トンです。それで 2000 トンにした改修になります。治水容量を上げつつも景色としてはできるだけ変えない、景観を保全することが一番重要であったプロジェクトです。実際はまだ完成し切っていません。今ここは、熊本地震やその後の大雨などで大変なことになっていますけれども、熊本城のすぐ東側を走っている区間になりまして、治水的にも、あるいは都市内緑地、都市内の自然環境としても非常に重要な場所です。

このプロジェクトにかかわってすごく思ったのは、やはり公共事業はえらい長い話だということです。僕もここにかかわって 10 年以上になるんですけれども、熊本でいうと昭和 28 年に大洪水がありまして、そこからこの改修という話はずっと議論はされていたんですけれども、昭和 60 年代ぐらいに

一回大きな改修案が出ました。木を全部切って川をガーツと広げるという改修案が出ましたが、先ほど鶴田さんのお話にもあったように、この景色が「森の都くまもと」のシンボルとして愛されてきたということがあって、ちょうど細川知事の時代でしたけれども、もう大問題になりまして結局その計画はある種おじゃんになって、ずっといろいろ議論しながら河川法の改正が後押しになって、やっと 2000 年代に入って動き始めたということです。

私は景観デザイン、空間デザインを専門としていますが、一つはそういうことを考えるときに、こういう履歴の、ある種の事業のアンカーですね。事業の最初の方では、住民に怒られたり、あるいは反対した人たちとの長い議論の最後を携わるわけですし、ある種事業の最後のアンカーであるということと、それは先ほど吉村さんが言われていたように、むしろ全体のプロセスを見直して前提条件を見直すとか、決まったことだから単に受け入れるというのはアンカーとしての責任は果たしていないと思うので、見直すということもすごく大事になると思います。

一方で使い手のスターターというか、結局それができまから、つまりバーチャルにその使い勝手はどうだろうとか、きれいだろうか、気持ちいいだろうか、使い勝手はいいだろうかと、恐らくできる前に最初に使う人が空間デザインの人だと思う

ていますので、それがアンカーであることとスターターであるということを両立することがすごく大事なんだろうなということを、例えばこのプロジェクトでもすごく実感しているところです。

実際は少し計画が縮小というか、この議論になったときは3000トン流す予定でしたので、今は暫定の2000トンです。現状も暫定整備でしかないんですけども、まち側に壁状の堤防を立てて、こっちは拡幅するんですけども、15mぐらいの拡幅で、健康な木は全て移植するというプロジェクトになりました。全体としては、整備としてはこんな感じです。

少しプロセスの話しますが、もう10年以上前ですが、私が最初にかかわりだして最初の打ち合わせのときの景色ですけども、これは今井先生という反対運動でも中心になって、この事業でも最終的には委員としてすごく頑張っていた先生です。一昨年に亡くなりましたけれども、この写真では、先生にすごい怒られています。

これは600m強の区間のデザインなんですけれども、大抵デザインとかやるときには、何でも計画やるときには、まず全体の大まかな絵を決めて徐々に精度を上げていくように当然します。僕はすぐ模型をつくるので、まず500分の1の模型をつくったんですけども、木なんて小さいので、発砲スチロールのボールに緑色を塗っただけの木を置いていたんですけども、このおじいちゃんが、木は丸じゃねえってすごい怒って。そんなの知ってるけれども。このときはちょっとよくわからなかったんで、僕だけ苦笑いしているんですが、しょうがないので木の勉強とか始めて。先ほども言ったように豊かな緑を保全するのか、治水をとるのかということでもめて、その合意がやっととれて事業がスタートしたということなので、この木をどうするかというのがこの事業では一番大事だったわけです。

結局、模型とはいえ丸で表現するというのは、結局木を量としてしか見ていないということになりますので、1個1個、例えばケヤキなのか、クスノキなのか、イヌマキなのか、エノキなのかということ、同じクスノキでも大きさが違います。そういうところへのセンスがすごく問われるということが最初はわかってなかったんです。少しずつわかるようになって、そのデザインの方法論的には全体を決めるのをやめたんです。

これは最初の住民説明会で、ここでもまた違った視点で僕が怒られて、思い出すのもすごく嫌なんですけど、これは100分の1の模型で、全部だと7mぐらいの模型になるんですけども、そんなの一遍につくれない。ただ、これぐらいのスケールにしますと木1本1本の表情もそれなりにつくれます。この木がこう移ってきて、まちとはこういう関係があるこの場所でどうすればいいかということ積み重ねていくことによって、ある程度固定したチームで積み重ねていくことによって、全体がいずれ見えてくればいいというアプローチになりました。これは私にとっても非常に新しいというか、刺激的な進め方でした。あとは施工業者さんなどを含めて常に議論しながらやっていく。今までの紹介にあったような話です。

今から簡単に具体の空間の話します。これは右岸側、まち側です。こういう細い壁を建てて、既存の緑や石垣を残して、裏側に壁を建てて守るというやり方をしているところです。これはできるだけ木を守ろうということで、例えばパラペットがぐねっとちょっと曲がっているのは、この木1本を残すためにぎりぎり曲げて残したという形です。これは出張所の所長さんの判断なんです。実際このパラペットはコンクリート、仕上げは多少工夫してたりしますが、コンクリートで少し角に笠石として石を置いているだけのすごくシンプルなものなんです。

これは横手川でも多分同じことをしたんだと思うのですが、何となくデザインというところいう形をどうするかみたい

な話になるのですが、特に右岸側、まち側は狭いということもあって何を工夫したかという、これは横手川と一緒にしたいと思いますけれども、市道が走っていて、市道に1.5mの非常に細い歩道がついているところ。管理用通路は道に面していますので1.5m幅でいい。それと普通にやると細い管理用通路と細い歩道という形になるわけですが、非常に使いづらいですね。ですので、この市道の歩道を上に上げてもらって広々とした道をつくる。この土手は、前は桜がありましたのでもう一回桜を植え直して、車道にとってもいい景観になるし、当然車道から少し離れて人がのんびり歩けますので、非常に快適な歩道になる。だからデザインというよりは計画論的なところですか、そういうことがすごく大事なんだと思います。

これは不法で緑化されているんですけど、ここら辺は町なかなのでお庭がないので、マンションの方が庭をつくっています。本当に人がよく通るようになりましたので、明らかに見てもらうためのつくり方になっています。

あるいは使い方で、これも好きな風景ですけど、パラペットは洪水から守るための壁ですけど、こんな使われ方もするというか、これは明らかに女の子の方が偉いんだろというのが見える景色ですけど、先ほど言った使い手のある種スターターになるということで、これは想像できていませんでしたけれども、こんな些細な使い方というか、本義ではない使い方みたいところまで、どこまで創造力を持ってできるかというのがすごく大事かなと思っています。

今度は左岸側、拡幅した方に行きますと、私たちにとってメインは、この大きな木をたくさん移植することでした。非常に大きな100トクラスのクスノキを2本、立曳き工法という江戸時代からやっている工法で移設したりしました。できた後はこんな感じです。これは全部移植した木々で、基本全部新しいスペースになるわけですけど、できた当初

から木の力によって非常に自然な場所になったかなと思います。

あと周辺に一体にできる残地がいろいろできましたので、そういうところもうまくして森がまちにはみ出すようなイメージをつくったり、あるいは敷地境界線あたりに生えていた木々を全部移植というのも何かちょっと本当に木のためにやっているのかという気もしたので、残せる木はできるだけ残そうと。結局10本もないんですけど、これは木を残すためにやりまして、小学校があるので小学校前のポケットパークにすることもあります。橋詰めとかここら辺は時間が足りなくなってきたのでカットします。

この石垣と水際なんかいろいろ工夫してやっています。石垣は高知の福留さんにもしっかり指導していただいて、いいものになっています。いろいろな方に見てもらって一番議論になるのは、水際に1.5m角のコンクリートのブロックをランダムに置いていて、島谷先生なんかは大嫌いでいつも大喧嘩になるんですけど、これは捨石工の中に四角いブロックを高さを変えながらランダムに入れていっているんです。

最初に地図を見せましたけれども、整備前はこの区間は町なかで現状、人が水に近寄るような場所ではなかったわけですけど、何とか近づきたい、あるいは水の存在を意識させたいということです。これは小学生でバスケット部で試合に負けて何かむしゃくしゃしていたらしくて、ここで泳ぐような遊びをしている。この四角がいいかどうか、形としてどうかというのはあると思うのですが、何よりもこういう場ができることによって、水に物理的にも近づけるし、その認知度が上がることがすごく大事だと思っています。それが実際のこういう行動に移るということです。

時間もなくなってきたのですが、ここら辺はイベントしたときの景色です。すばらしいですね。ただ、残念ながらイベント

時ですけれども、こんな感じの景色が広がっているということです。

最後に、この緑の区間では防災か景観かが最初に大事だったんですけれども、簡単に言うと1年に1回ある大水のための整備をするのか、毎日のための整備をするのかということだと思いますが、それは矛盾することではないですね。これが2012年の九州北部豪雨のときの景色ですけれども、これは30cmぐらい来ました。つまりこの壁が洪水を守ったわけですけれども、ふだんは木陰の中のベンチのような形になっています。だから、こういことをどう求めていくのかということが大事だと思いますし、特に防災で言うと公助、共助、自助という話がありますけれども、堤防をつくるだけだと公助ですね。この緑の区間では、これプラス何か良質なパブリックスペースをつくった。そうすると先ほどのような活動の場になって共助になったり、あるいは女の子達のように川で遊ぶことによって川の意識を高めることになるのかなと思います。

これは住民に卒論でアンケートを取った結果ですけれども、~~これは資料にないので申しわけないですが~~、使う人がふえたというのは当然だと思いますが、僕がうれしかったのは、例えば白川をながめる回数がふえたとか、こっちはちょっとした行動の変化を聞いたグラフになります。あるいは水位の変化や降水量を気にするようになったというのが半分以上いたりとか、きれいなものができたというよりも、そういう意識の変化に少し貢献できたのがよかったのかな、成果なのかなと思っています。

これは地震の後ここで炊き出しをやったりしました。ただ、今熊本は復興でこれはきのうの写真です。ここはちょっと暗くて見えませんが、きのう大きな流量が流れまして、流木がすごいですね。恐らく地震で崩れたものが、きのうの雨で大量に流れてきたということです。現状、熊本は地震あるいはこれから雨に対する恐怖に戦っているわけですね。

れども、何とかこの緑の区間で実現できたような防災と景観というか、利用の両立というものをまち全体で求めていると思います。

以上です。